

薬薬連携の現状と課題
～当院における薬剤管理サマリーの活用～

水戸中央病院
○佐々木恵

【序論】

薬薬連携の提唱から「退院時薬剤情報連携加算」が設定されて3年目を迎えた。当院では、日本病院薬剤師会の「薬剤管理サマリー」の様式¹を参考に独自の薬剤管理サマリー（以下、サマリー）を作成し保険薬局への提供を行っている。

本発表では、サマリーの提供実績や保険薬局からの返信率を集計し、サマリーを通じた薬薬連携の現状と今後の課題について検討した。

【方法】

- ① 令和4年4月1日から6月30日までの退院患者のうち、サマリー提供対象になり得る患者と実際の提供数、提供されなかった患者はその理由を確認した。
- ② ①でサマリーを提供した患者の令和4年1月1日から9月30日までの入退院履歴を確認した。
- ③ ①で提供したサマリーについて、保険薬局からの返信率を算出した。
- ④ 薬剤管理サマリーの返信用紙（以下、返信用紙）を作成した。令和4年9月1日から9月30日までの退院患者について、返信用紙を添付したサマリーを保険薬局に提供し、その返信率を算出した。

【結果】

- ① 実際にサマリー提供された患者は、サマリー提供対象になり得る患者の3割程度にとどまった。提供されなかった理由として、“提供先の保険薬局が不明”が最多だった。
- ② サマリーを提供した患者の約4割で複数回の入退院があった。
- ③ 返信用紙を添付しなかったサマリーは、保険薬局からの返信率が約1割だった。
- ④ 返信用紙を添付したサマリーは、保険薬局からの返信率が約5割だった。

【考察】

現状では、サマリーを提供する患者はかかりつけの保険薬局を把握できた患者に限られている。しかし、来年度から始まる電子処方箋の導入や、マイナンバーカードに保険証機能や薬歴を紐づける機能が広がれば、病院薬剤師はよりスムーズに処方歴や調剤した保険薬局を確認できるようになるだろう。

サマリー提供時に返信用紙を添付したところ、返信率が上昇した。当院が作成した返信用紙は“病院薬剤師が知りたい内容”についての簡単な質問を設けて薬局薬剤師が回答しやすいよう工夫した。薬局薬剤師ならではの見解を記載できる自由記載欄も用意した。サマリーを提供した患者の約4割が数か月のうちに入退院を繰り返している現状を鑑みると病院と保険薬局双方向での情報伝達・情報共有はより良い医療への必須事項と考える。

薬薬連携を進めるには薬局薬剤師、病院薬剤師の双方の協力が不可欠であり、患者情報を共有できるサマリーを通して地域のつながりを深めたい。

¹ 日本病院薬剤師会